

## 書評 服部美奈著 『インドネシアの近代女子教育 -- イスラーム改革運動のなかの女性』

著者	中村 光男
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	46
号	1
ページ	88-92
発行年	2005-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007626">http://hdl.handle.net/2344/00007626</a>

服部美奈著

『インドネシアの近代女子教育  
イスラム改革運動のなかの  
女性』

勁草書房 2001年 xiii + 349 + 30ページ

なかむら みつお  
中村光男

本書は名古屋大学大学院教育学研究科において1999年に受理された比較教育学専攻の博士論文「インドネシアにおけるイスラム改革運動と近代女子教育 ディニア・プトリの社会史」の加筆・修正版である(301ページ)。

「ディニア・プトリ」(Diniyyah Puteri)は、1923年、インドネシア・西スマトラの小都市パダン・パンジャン(Padan Panjang)で、ムスリム女性指導者ラフマ・エル・ユヌシヤー(Rahmah El Yunusyiyah, 1900~69年)によって開設された蘭領東インドで最初のイスラム女子教育学校である。ディニア・プトリは1930年に初めて10名の卒業生を出して以来、未婚の女子のための全寮制の総合的イスラム学園として着実に発展し、2000年現在総員1000人以上の中学、高校、大学レベルの生徒・学生と教員が、共同生活を送っている(35~36ページ)。卒業生はスマトラ島各地ばかりでなく、首都ジャカルタや隣国のマレーシアまで広く存在し、その多くが教師(とくに宗教教師)、保健・看護婦、大学教員、公務員、企業経営者、女性組織指導者、中央・地方議会議員として活躍している(248~262ページ)。

すでに、オランダ植民地時代の末期において、ディニア・プトリは近代的イスラム女子教育の拠点としての社会的評価を確立し、創立者のラフマは「イスラム学校のカルティニ」という名声を得た

(4ページ)。著者は、ディニア・プトリを「インドネシアにおけるイスラム改革運動と近代女子教育の特質を捉えるための適切な事例」(4ページ)と見なし、本研究を通して「ムスリム女性たちが近代にどのように向き合おうとしたのか、まだどのようなムスリム女性を育てようとしたのかを、20世紀初頭からたどりつつ、かつ現在まで続く問いとして明らかに」(iページ)しようと試みた。

著者は本研究に着手した動機を次のように述べている。1990年、「初めてインドネシアを訪れたとき、社会のなかで活躍するムスリム女性が、同時に自分が女性であることを堂々と誇らしげに語ることに新鮮な驚きを覚え」、ムスリム女性への画一的な先入観と偏見を反省した(iiページ)。さらに、著者にとって、イスラムは「全く未知の世界」であったが、「価値形成における信仰の要素に以前から興味」があり、イスラムにおいては「他の宗教に比べ、信仰と価値形成が密接に結びついているように思われた」(301ページ)。そして、「調査地に出会う、あざやかなムスリム服を身にまとったインドネシアのムスリム女性たちが、とても堂々と、そして生き生きとしているように見え、その根源を探ってみたくなった」(301~302ページ)という。

著者は本研究に際して複数のアプローチを取った。序章によると、著者はまず、(1)比較教育学におけるポスト・モダンのパラダイム変化にともなって、国家的な教育制度ではなく、「ミニナラティブ」(小さな物語)へ関心を集中した(6ページ)。具体的には「インドネシアのある地域の一つの学校とそれに関わる人々」(5ページ)＝ディニア・プトリを考察の対象と設定し、地域研究のアプローチによって、すなわち、国民国家の枠組みにとらわれずに、特定地域の社会的文化的特質を明らかにし、その中に研究対象を位置づける試みを行った(8~9ページ)。(2)当然、このアプローチは、エスノグラフィックな方法、すなわち研究対象の教員・生徒たちと学校・寮で生活をともにする長期の参与観察をデータ収集の主要な方法として要求した(7, 10ページ)。さらに、(3)著者は外的観察だけでなく、行為者自身の行為の意味づけを理解する解釈的アプローチの必要を感じ

た(9, 33ページ)。そこで、(4)フィールドワークの一部として、アラビア語およびイスラーム諸学の基礎を学習し、教科書や教室内外の言説における教育内容が、ムスリム女性の価値形成にどのように関わっているか、内面的理解のための手段を身につけた(34ページ)。また、(5)インタビューによって、指導者・卒業生の生活史(ライフヒストリー)をフォローし、ムスリム女性個人の日常生活におけるイスラームの関与の実態を行為者自らの解釈を通して理解するアプローチを取った(10, 34ページ)。

このように、著者は多面的、多層的研究方法を自らに課し、1993年11月から96年3月まで、約2年半のフィールドワーク期間の大半を、「ディニア・ブトリの寮内で寮母および生徒と生活を共にし、日常的に実践されているイスラーム女子教育の様子を参与観察・インタビューを通して考察した」(33~34ページ)。その間、ディニア・ブトリおよび現地の国立イスラーム宗教大学において、「イスラーム諸学およびアラビア語の基礎を約2年半にわたって学んだ」(34ページ)。

本研究は比較教育学、地域研究、イスラーム学の3学問分野にわたる学際的アプローチを取ることによって、近代、イスラーム、女性の3問題領域の交錯過程を、西スマトラ・ミンカンカバウ(Minangkabau)のひとつの女子学校の社会史を通して実証的に明らかにした。その中で、とくに著者はこれまで東南アジア・ムスリム社会の研究手段として看過されてきたアラビア語能力とイスラーム学の基礎的知識を身につけ、しかも、女性にしか入ること許されていないムスリム女性の生活空間に身を置き、研究対象であるムスリム女性自身の信仰と価値形成過程の内面的理解を試みた。それ故、本書は、わが国の東南アジア地域研究のみならず、イスラーム社会研究においても、新しい地平の展開を告げる労作となっている。

本書の構成および各部、章の見出しは以下のとおりである。

はしがき	
序 章	インドネシアの近代女子教育とイスラーム
第 部	女性と教育をめぐる議論の幕開け
第 1 章	モダニティの模索とイスラーム 女性と教育をめぐる
第 2 章	蘭領東インド期のディニア・ブトリ イスラーム改革運動のなかの女子教育
第 部	国民教育制度との調整・再興
第 3 章	国民国家形成期のディニア・ブトリ 1945年~1965年
第 4 章	「開発」体制のなかのディニア・ブトリ 1965年~1990年
第 部	イスラーム女子教育の現代的意味
第 5 章	ディニア・ブトリのイスラーム教育空間 イスラーム女子教育の現代的意味
第 6 章	ディニア・ブトリのイスラーム社会空間 卒業生の生活史を通して
終 章	イスラーム女子教育の意味と変容
あとがき	

以下、各部各章の主要なポイントを紹介する。

序章においては、すでにふれたアプローチの問題に加えて、ディニア・ブトリがなぜ、ミンカンカバウ地域で発足したか、興味ある考察が述べられている。周知のように、パダン・パンジャンをふくむミンカンカバウ地方では、典型的な母系制社会の伝統が持続し、イスラームと母系制のアダット(adat, 慣習法)が不可分に共存し、女性中心の親族組織、地域社会構成が社会の特質となっていた。イスラーム改革主義はミンカンカバウにおける女性の地位の高さの再認識をもたらし、「イスラームでは女性に対して高貴な位置を与えていたという思想が、他の地域よりも早く、そして抵抗なく受け入れられ」(29ページ)、これがディニア・ブトリの設立と発展の基盤となったという。

第 部第 1 章では、ディニア・ブトリ設立の<思想的>背景が扱われる。20世紀初頭、オランダ植民

地支配の深化によって、西スマトラにおける経済、行政、教育への「西洋」の浸透が進み、これに対して現地社会は様々な思想的対応を示し、「進歩」と「モダン」(modern, モダニティ)を模索した。対応は大別して、西洋化の全面的受容、西スマトラ独特の母系制社会の慣習法再解釈、さらにイスラームの自己革新に分れた。これらは、ともに伝統的イスラーム教育の保守性、とくに女子教育の無視を厳しく批判した。その中で、とくにイスラーム改革運動は中東におけるモダニズムの展開を受けて、イスラーム教育の改革を進め、影響を拡大した(47~95ページ)。

第2章においては、このような背景を踏まえて、ディニア・プトリの創業者ラフマに強い影響を与えた兄ザイヌデイン・ラバイ(Zainuddin Labai)の教育思想、とくに女子教育に関する思想が検討されている。ラバイはエジプトのモダニズム指導者ムハンマド・アブドゥ( Muhammad Abduh)らの思想に共鳴し、1915年、パダン・パンジャンに近代的イスラーム宗教学校=マドラサ・ディニア(Madrasah Diniyyah, ディニア・スクール)を設立した。改革の眼目は学年制度の導入、宗教教育カリキュラムの革新(アラビア語習得、クルアーン・ハディース〔預言者ムハンマド言行録〕の自主的理解、マレー語・アラビア語教科書の作成)、世俗の科目、男女共学制の導入などであった。ラバイは、教育を男女イスラーム教徒にとって神から与えられた平等の権利および義務と見なし、とくに、伝統的イスラーム教育において看過されてきた女子教育の必要性を強調した(96~112ページ)。

妹のラフマは女子教育の空白克服のため、1923年自ら進んで女子宗教学校(ディニア・プトリ)を設立した。ラフマは女子教育を「母としての女性の育成」という思想的枠組みで捉え、「天国は女性(母)の足元にある」というハディースに依拠して、母親の偉大さ、高貴さを強調した(100ページ)。さらに、女性のコドラット(kodrat, 神の定めた女性の役割や本性)は「優しさ」にあり、そこから、家庭、学校、社会におけるイブ・ブンディディック(Ibu Pendidik, 「教育者としての婦人」)の育成が女子教

育の目的とされた(122ページ)。このようにラフマは西洋の女性解放運動とは異なる思想的根拠をもって、ムスリム女性のアイデンティティーを強調し、イスラーム女性運動の方向性を示した。

兄ラバイとともにラフマは伝統主義に従った両親の世代と思想的に訣別した。自身は16歳で結婚したが23歳で離婚、その後再婚せずディニア・プトリの発展に専念した。ラフマの学習の多くはプライベート形式によって行われた。幼少時に兄たちからアラビア文字とラテン文字の読み書きの手ほどきを受けただけで、ラバイの学校に一時在籍したが、むしろ、ハジ・ラスル(Haji Rasul)ら著名なウラマー(イスラーム学者)から直接指導を受けることを好んだ。ラフマはイスラーム学以外の領域に関しても旺盛な知的意欲を示し、産科学、保健学、応急処置法、さらに体操を修得し、直ぐにディニア・プトリの教科に取り入れた(133ページ)。

オランダ統治期末期の1937年までに、ディニア・プトリは初等教育(4年)、中等教育(3年)、教員養成(3年)の学年編成を取り、近代的な校舎と寮の建物を完成させ、アラビア語とイスラーム諸学に加えて、外国語(英語、オランダ語)および普通科目(地理、歴史、民族、生物、国家法、商業、簿記、絵画、保健、裁縫、教育心理など)を導入し、宗教に根ざした進歩的学校として社会的評価を確立した(117~121ページ)。また、ラフマは教育者としてばかりでなく、西スマトラを代表するイスラーム女性運動指導者として、全国的に、さらにはマレー半島にまで活躍の場を広げるようになった(130~131ページ)。

第部(第3章、第4章)では、1945年以降の独立国家インドネシア共和国における国民教育制度の発展との関連で、ディニア・プトリの展開が考察されている。まず第3章では、スカルノ大統領統治期(1945~65年)における国立初中等学校が目覚ましい普及、また、宗教省管轄下のイスラーム宗教教育と教育省管轄下の普通教育の二元的教育制度の容認と関係整備の過程が記されている。ディニア・プトリはこの環境の変化に対応して、初等教育を漸次縮小、廃止(1963年)して中等教育に集中した。さらに、

1960年代前半には国立イスラーム宗教大学の設置に対応して、幼稚園教師育成のためのアカデミー（高等教育レベル）を設置した。このように、インドネシアの国民教育制度の発展にともなって、ディニア・プトリは初中等教育中心から中等教育、さらに高等教育へと重心をシフトさせた（163ページ）。

第4章では、スハルト体制下における宗教政策、教育政策の転換の影響が考察される。スハルト政権は、イスラームの非政治化を図る一方、パンチャシラ国家原則の枠内におけるイスラーム教育の振興と普通教育との連携強化（1975年3大臣決定）を進めた。さらに、開発路線への女性参加、とくに女性の母・妻として役割の振興と職業を通しての社会参加が国家の女性政策の基本路線として推進された。この環境下で、ディニア・プトリは独自にイスラームの立場から「開発と女性」の理念を解釈し政府に協力した。また、スハルト時代になってディニア・プトリの指導部の世代交代が起こった。1969年初代指導者のラフマの死去にともなって、2代目指導者に姪のイスナニア・サレ（Isnaeni Saleh, 1929～90年）が就任した。ほぼ独学だったラフマと異なって、イスナニアはディニア・プトリで高校レベルを卒業後、ジャカルタのイスラーム高等学院、エジプト・カイロ大学の教育学部（ダルル・ウルム：Darul Ulum）、さらに国内の国立イスラーム大学で学び、学士号を得た。この違いは、スハルト体制下の国家政策の変化に対するディニア・プトリの対応の変化にも現れた。ディニア・プトリは宗教教育のみならず普通教育の初中等学校卒業の女子をも受け入れ、さらに高校レベルの卒業生を宗教教育のみならず普通教育の大学に送り込んだ。このように、女性の人生コースの選択肢が多様化する中で、ディニア・プトリはイスラーム精神に基づく女性の育成を一貫した基本理念として堅持し、独自のアイデンティティーを育成した（211ページ）。

第部（第5章、第6章）では、これまでの歴史的考察を踏まえてディニア・プトリにおけるイスラーム女子教育の現代的意味が検討されている。まず、第5章では、ディニア・プトリという学園＝イスラームの教育空間の構成の原理となっている基本

的なイスラームの人間観、イスラーム教育の枠組み、さらに女子教育の理念と実態が記述、分析されている。とくに、現行の宗教教育の内容＝価値観に改めて注目し、創立以来の基本理念である人間平等観と男女役割観、すなわち神によって男女は平等の権利と義務を与えられているが、女性はとくに神の定められた本性＝優しさによって、家庭、職場、社会で次代の育成に当たる教育者の役割を担うという理念に変化がないことを確認している（230～236ページ）。

さらに、ディニア・プトリの教育に特徴的な全寮制の意義について、女子寮の生活規範、服装規定の検討を通して考察が加えられている。外出の制限、家族以外の面接禁止、手紙の検閲、電話、テレビ、娯楽の制限、休暇帰省は両親の許のみなど、寮規則はきわめて厳しい（236～243ページ）。また、イスラーム女性に相応しいとされる服装規定はムスリムとしての内面的信仰を外的行為によって実践するものとして、創立以来、ディニア・プトリの宗教教育の柱とされてきた（243～249ページ）。これらの厳しい社会との隔離と規律の厳守はディニア・プトリに「聖なる牢獄」（251ページ）の別名をもたらした。ディニア・プトリの教育理念によると「学校 家庭

社会」の3要素が教育空間を構成する。しかし、厳しい寮規則・服装規定によって学校は家庭と社会から人為的に隔離されている。生徒自身や社会から与えられた「聖なる牢獄」という言葉はこのパラドックスを表現している。著者によると、ディニア・プトリは修道院と異なり、聖俗一致を原則とするイスラームに基づく最終的な教育目的は、卒業後、家庭や社会に入って活躍できる女性の育成であり、そのために、思春期という人間形成にとって重要な時期に、社会とは隔離された教育空間を設定することによって、生徒たちには外の世界を客観的に見る能力が養われるとされる（252ページ）。しかも、イスラーム学の基礎学力を身につけることによって、生徒たちは卒業後も、自らイスラームの原典に戻って解釈し、価値判断を行う能力を獲得している。従って、隔離された寮生活はディニア・プトリの教育にとって不可欠の構成要素だとされる（同ページ）。

第6章では、ディニア・プトリの社会的な広がり

が検討される。すなわち、卒業生個人の生活史・家族史を通して見た卒業生の社会的対応、社会的活動、社会的影響の実態調査の結果が提示され、分析されている。第1世代（1920～40年代生まれ）と第2世代（50年代生まれ以降）の比較で、人生選択における共通点と相違点、ムスリム女性の社会進出と基本的な女性観の持続性が明らかにされている。両世代間の共通点は、卒業後結婚し家庭に入って、妻、母としての女性の役割を果たし、そのうえで職業や組織的活動を通して社会に奉仕するというパターンである。両世代間の顕著な相違は、とくに1960年代以降生まれの世代で、ディニア・ブトリを卒業後、宗教大学に加えて普通大学に進学する女性が増えたこと、また、官庁や団体などで政府関係の職場で働く女性が現れたことであるという。概して、第2世代は第1世代と比較して、卒業後の職業選択の幅が拡大し多様な生き方をするようになった（255～289ページ）。

終章では、ディニア・ブトリに見られるインドネシア近代イスラーム女子教育の特質について著者の結論が述べられている。ディニア・ブトリ創立以来、イスラーム改革思想の女子教育理念の根底にある人間平等観、男女役割観という基本思想は変化なく一貫しているが、実際のムスリム女性の生き方は環境の変化と多様なイスラーム解釈に支えられて多様化している。改革思想は女性にもクルアーンとハディースの自主的理解能力の獲得の道を開き、イスラーム解釈の自由度をもたらし、これらの多様な生き方を可能にした。このように見てくると、「イスラームの女性観」という普遍的テキストは存在せず、多様な解釈の可能性が解釈主体にたいして開かれており、「ディニア・ブトリの女性たちによって解釈されるムスリム女性は、男性と同等の権利をもつ、開かれた女性像である」と結論されている（299ページ）。

最後に、この著作の学問的および実際の意義について評者の評価を述べたい。第1に、評者の知る限り、本書はインドネシアにおけるイスラーム女子教育の近代化の事例研究として、インドネシア内外で最も包括的、系統的な研究である。ディニア・ブ

リというイスラーム女子教育、さらにイスラーム女性運動の一事例の思想的、歴史的、社会的根源が説明されている。その結果、本書は、著者自らが問うた問い、なぜ、著者が出会った「ムスリム女性たちが、とても堂々と、そして生き生きと」（301～302ページ）自信と誇りに満ちて生きているかに対する答えが示されている。すなわち、ディニア・ブトリで培われたイスラーム原典理解と解釈の能力、普通科目学習を通して養われた社会的適応力、さらに社会的成功の実績が、彼女らに確固としたアイデンティティと自信を与えているのである。このディニア・ブトリのイスラーム女性運動と女子教育の拠点としての活力は今後も持続するものと思われる。その活力の知的理解を試みた本書の学問的意義は大きい。

第2に、実際の意義の観点から見ると、ディニア・ブトリがイスラーム女子教育のモデルとして、どこまで普遍性をもつかという点が興味を惹く。評者の知る限り、インドネシアの国民教育の枠組みの中でディニア・ブトリはイスラーム女子教育のモデルとして高く評価され、ディニア・ブトリの卒業生による地方学校の設立、ディニア・ブトリの教育理念の多様な制度化が行われている。また、ディニア・ブトリの実績を宗教省管轄下の宗教教育体系へ組み入れる作業も行われている。このように、インドネシア国内におけるディニア・ブトリのモデルとしての普遍的適応性は高い。では、イスラーム世界の他地域への普及の可能性はどうかであろうか。すでに、マレーシアでは卒業生によって同種の学校づくりが行われている。東南アジアの他の地域へのディニア・ブトリのモデルの「輸出」の可能性もおおいにある。また将来、イスラーム世界におけるインドネシアの指導性の向上とともに、イスラーム教育、とくに女子教育におけるインドネシア・ムスリムの知的指導性が発揮される可能性も考えられる。この点で、イスラーム世界の他の地域で、イスラーム教育、とくに女子教育、さらに「開発と女性」の分野で活動しているわが国の国際協力関係者にとって、本書は貴重な参考書となるであろう。

（千葉大学名誉教授、ハーバード大学中東研究センター客員研究員）